

サイス王朝（第 26 王朝）時代のエジプト — 対外政策を中心に —

Egypt under the Saite Dynasty (the 26th Dynasty): Focusing on its Foreign Policy

藤井 信之 *

Nobuyuki FUJII*

1 はじめに

サイス王朝とは、アッシリア帝国の滅亡とアケメネス朝ペルシア帝国によるオリエント世界統一の間に栄えたエジプト第 26 王朝のことである。「世界史」の教科書では四国分立時代として、新バビロニア・メディア・リュディアと共に言及される。サイスを発祥地とする王朝は他にもある（第 24 王朝、第 28 王朝）が、第 26 王朝期が後期王朝時代（Late Period）最大の繁栄期と目され、エジプト史の中でも重要な位置を占めることから、第 26 王朝をサイス朝と通称している。

サイス王朝時代のエジプトは、シリア・パレスティナをめぐる新バビロニアと対立し、幾度か直接戦闘も交えていた。一般に新バビロニアが優勢であったと考えられていることから、繁栄期としてのサイス朝の評価はいまひとつ芳しくない。また『旧約聖書』においても、この時代のエジプトは頼りにならない老大国として「折れた葦」と揶揄されている。しかし歴史の父ヘロドトスはその著『歴史』のなかで、「エジプトはアマシス王の治世下に、空前の繁栄を示したといわれる（松平千秋訳）」と記し、この時代のエジプトの繁栄を伝えている。このように古代からサイス王朝の評価は割れているのだが、実際のところはどのように考えることができるのだろうか？ 本稿では、サイス王朝の対外政策、なかでも対新バビロニア政策を中心に王朝史を概観しながら、同王朝の再評価を試みる。

* 関西大学国際文化財文化研究センター

(Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University, Japan)

2 サイス王朝時代を知るための主な参考文献

我が国では、これまでサイス王朝時代については殆ど研究がなされておらず、それゆえ邦語で読める文献もあまりない。また初学者の導入となる内容を提供しようというのが本セミナーの趣旨でもあるので、まず初めにサイス王朝時代に関する基本的な文献を紹介しておこう。

まずサイス王朝時代を含む幾つかの通史を紹介する。古くから前1千年紀のエジプト史の通史として定評があるのが K. Kienitz, *Die politische Geschichte Ägyptens vom 7. bis zum 4. Jahrhundert vor der Zeitwende*, Berlin 1953 で、サイス王朝時代も取り上げられている。英語では、K. Myśliwiec, *The Twilight of Ancient Egypt: First Millennium B.C.E.*, Ithaca and London 2000、A. Lloyd, “The Late Period (664-332)”, in I. Shaw, (ed.) *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford U.P. 2000, 369-394 を挙げることができる。またやや古くなったが『ケンブリッジ古代史』の該当箇所、T. G. H. James, “Egypt: The Twenty-fifth and Twenty-sixth Dynasties”, in J. Boardman, et al. (eds.) *The Cambridge Ancient History*, Vol. III, Part 2, Cambridge U.P., 1991, Ch.35, 677-747 も詳しい記述を提供しており、註で提示される豊富な参考文献によって1980年代までの参照されるべき主な研究を知ることができる。

次に本稿では取り上げないが、サイス王朝時代の支配体制についての研究を紹介しておく。まず挙げられるべきは、D. Agut-Labordère, “The Saite Period: The Emergence of a Mediterranean Power”, in J. C. Moreno Gracia, (ed.) *Ancient Egyptian Administration*, Leiden 2013, 965-1027 であろう。サイス王朝時代の支配体制全般を取り上げた最近の研究で、幾分議論の余地のある箇所もあると考えるが、この分野では必読の論文と言えるだろう。次に研究書を挙げる。D. A. Pressl, *Beamte und Soldaten : Die Verwaltung in der 26. Dynastie in Ägypten (664-525 v. Chr.)*, Frankfurt am Main 1998 は、サイス朝期の主要な官職保持者のプロソポグラフィを整理検討したもので、この分野の基礎研究となっている。軍幹部については、前1千年紀の軍幹部のプロソポグラフィを整理検討した P.-M. Chevereau, *Prosopographie des cadres militaires égyptiens de la Basse Époque*, Antony 1985 も重要な研究である。英語ではやや古くなったが、M. F. Gyles, *Pharaonic Policies and Administration, 663 to 323 B.C.*, The University of North Carolina Press 1959 がある。サイス王朝時代のテーベではアメン神妻が重要な役割を果たしたが、このアメン神妻については M. F. Ayad, *God's Wife, God's Servant : The God's Wife of Amun (c.740-525 BC)*, London and New York 2009 がある。またアメン神妻を頂点とする神殿行政については、E. Graefe, *Untersuchungen zur Verwaltung und Geschichte der Institution der Gottesgemahlin des Amun vom Beginn des Neuen Reiches bis zur Spätzeit*, Wiesbaden 1981 がある。

サイス王朝期の王墓はサイスのネイト神殿境内に造営されたが、遺跡の荒廃がひどく未だ確かな遺構は発見されていない。当時の高官らは、メンフィス近郊では巨大なシャフト墓を、テーベでは主にアサシフ地区に巨大な岩掘墓を造営した。メンフィス近郊のシャフト墓については、M. Stammers, *The Elite Late Period Egyptian Tombs of Memphis*, Oxford 2009、W. el-Sadeek,

Twety-Sixth Dynasty Necropolis at Gizeh, Wien 1984 がある。またアブシールでも後期王朝時代の墓地が発見されており、なかでも注目されるのがペルシア支配期まで生き、自伝碑文を残したことで有名なウジャホルレスネトのシャフト墓である。この墓の発掘報告が L. Bareš, *The Shaft Tomb of Udjahorresnet at Abusir*, Praha 1999 として公刊されている。テーベの岩掘墓については、D. Eigner, *Die monumentalen Grabbauten der Spätzeit in der thebanischen Nekropole*, Wien 1984 でその概要を知ることができる。このような墓に埋葬されたサイス朝期の高官たちは、しばしば祠堂を捧げ持つ自らの彫像を制作した。このような彫像に刻された碑文を読み解き、当時の高官らの“自己像 (self-image)” を分析した H. Bassir, *Image & Voice in Saite Egypt*, University of Arizona Egyptian Expedition 2014 も注目される最近の研究である。

サイス朝諸王もエジプト各地に神殿を建設したが、その概要を D. Arnold, *Temples of the Last Pharaohs*, Oxford U.P. 1999 で知ることができる。またサイス朝期には、エジプト本土防衛のために幾つもの要塞が建設された。これら要塞を取り上げた研究に K. Smoláriková, *Saite Forts in Egypt: Political-Military History of the Saite Dynasty*, Prague 2008 がある。

サイス王朝時代の史料は、K. Jansen-Winkel, *Inschriften der Spätzeit, IV: Die 26. Dynastie*, Wiesbaden 2014 に集成されている。殆どの史料がヒエログリフの翻刻で提示され、加えて史料の所在と出版情報がそれぞれの史料に添えられており、非常に有益である。サイス王朝史研究には無くてはならない文献である。またサイス王朝時代の碑文は、古典語となった中エジプト語で書かれており、文法や綴り字法などにこの時代特有の特徴がみられるため、これらの点に留意して読み進めなければならない。こうしたサイス朝期の碑文を研究したものに P. Der Manuelian, *Living in the Past*, London 1994 があり、この時代の碑文を読み進めるうえで欠かせない研究となっている。この著作には、サイス朝期の主要な碑文史料の転字と英訳も提示されている。またこれらエジプト語史料からは窺い知れない情報が、ヘロドトスやディオドロスなどの古典文献史料や『旧約聖書』、それに新バビロニアが残した楔形文字史料などにある。なかでもヘロドトス『歴史』の第2巻には、サイス王朝時代の貴重な情報が含まれている。このヘロドトスの注釈書として参照すべき文献に A. B. Lloyd, *Herodotus Book II*, 3 Vols, Leiden 1975-1988 がある。ヘロドトスのサイス王朝期に関する記述が取り上げられているのは第3巻の A. B. Lloyd, *Herodotus Book II, Commentary 99-182*, Leiden 1988 である。また新しいヘロドトスの注釈書が D. Asheri, et al. *A Commentary on Herodotus Books I-IV*, Oxford U.P. 2007 として出版されており、エジプトの記述に充てられた『歴史』第2巻を同じくロイドが担当していることから、上記の注釈書と併せて参照すべきである。研究者は、これらの史料を読んで歴史を再構築していくことになるが、その際、どのような事に留意すべきかを考えさせてくれる R. B. Gozzoli, *The Writing of History in Ancient Egypt during the First Millennium BC (ca. 1070-180 BC): Trends and Perspectives*, London 2006 も併せてここで紹介しておく。最後に、2004 年に開催されたサイス王朝時代に関する国際会議で発表された議論をまとめた論集が、D. Devauchelle, (ed.) *La XXVI^e dynastie continuités et ruptures*, Paris 2011 として出版

されており、近年の研究動向をこの論集で知ることができることも付け加えておく。

3 プサメテク 1 世 (前 664 年—前 610 年)¹ [図 1]

一般にエジプト学では、プサメテク 1 世からを第 26 王朝とするが、マネトン²は第 26 王朝としてプサメテク 1 世に先立つ 4 人の王を伝えている³。アムメリス³、ステフィナティス、ネケプソス、ネカオの 4 人だが、このうちアムメリスはエチオピア人とされていることから、クシュ王朝 (第 25 王朝) がサイスに置いた総督であったと推測される。4 人目のネカオはネカウ 1 世のことで、プサメテク 1 世の父であった。プサメテク 1 世に至るこれら諸王は、先サイス王朝とも呼ばれ、クシュ王朝の支配下にあつてサイスとその周辺の地域の支配を委ねられていたと考えられる。しかし史料が極めて限られており、詳しいことはよく分かっていない⁴。アッシリアは特にネカウ 1 世を重視し⁵、エジプト支配のための傀儡王としてサイスとメンフィスの王に任じていた⁶。そしてアッシュルバニパルは、前 667 年～前 666 年のエジプト侵攻時に、ネカウ 1 世の一子をさらにアトリビスに置いた。このネカウ 1 世の子は、アッシリア語でナブシェズィバンニ (*Nabû-šēzibanni*) とされている⁷。この人物が、プサメテク 1 世その人であった可能性が高い。

前 664 年、長らくアッシリアに対抗していたクシュ王タハルカが没すると、その後を継いだタヌタマニが北伐を開始しメンフィスを奪還した。この時、ペル・ソペド侯パクルルをはじめとするデルタの諸侯は、タヌタマニのもとを訪れて彼に恭順の意を示している。このことはタヌタマニ王の『夢の石碑』から知られるのだが、この史料からはネカウ 1 世の命運については何も分からない⁸。メンフィスは激しい戦闘の後に奪還されたことが伝えられているので⁹、メンフィスの王でもあったネカウ 1 世はこの時の戦いで落命したのかもしれない。あるいは戦後、親アッシリア派として処刑された可能性もある¹⁰。いずれにしてもプサメテク 1 世はこの前 664 年から自らの治世年を数えていることから、この年にネカウ 1 世は他界したと考え

1 本稿における王の治世年については Hornung, 2006 に依拠する。

2 Waddell, 1940, 168-173.

3 アフリカヌスはこの人物を伝えていない。エウセビオスのアルメニア版ではアメレスとなっている。Cf. *loc. cit.*

4 これらの王については Yoyotte, 2011, 12-16; Moje, 2014, 156-157, 261-265 を参照。

5 アッシュルバニパルは特にネカウ 1 世に目をかけたと言っている。Cf. Onasch, 1994, 107, 121.

6 アッシュルバニパルは父エサルハドンが任命したエジプトの“王達”を列挙しているが、そこでネカウ 1 世はサイスとメンフィスの王とされている。Cf. Onasch, 1994, 119.

7 Cf. Onasch, 1994, 109, 121.

8 タヌタマニ王の『夢の石碑』については、Grimal, 1981, 3-20, pls. I-IV; Onasch, 1994, 129-145; Eide, 1994, 193-209; Ritner, 2009, 566-573. ペル・ソペド侯パクルルらが恭順の意を示したことは、36-38 行目に記されている。

9 同ステラ、16-18 行目。

10 ヘロドトスはエチオピア王が父ネコス (ネカウ 1 世) を殺したと伝えている (『歴史』II, 152)。

られる。

アトリビスに置かれたナブシェズィバンニの命運についても『夢の碑文』は何も伝えていない。しかしヘロドトスによると、プサメテク 1 世は父が殺害されたとき、シリアへ逃れたと伝えている（『歴史』II, 152）。親アッシリア派としてクシュと対立していた彼は、アッシリアを頼って亡命した可能性が高いであろう。

クシュ王タヌタマニのエジプト侵攻を受けて、アッシリア王アッシュルバニパルは直ちにエジプトへと軍を發した。エジプトへ侵攻したアッシリア軍はメンフィスを陥落させると更に南進し、ついに前 663 年にはテーベを攻略した。タヌタマニはエジプトを放棄してヌビアへと戻っていった。ヘロドトスはサイス州のエジプト人がプサメテク 1 世を復権させたとしているが（『歴史』II, 152）、彼を復権させたのはやはりアッシリアであったろう。

復権を果たしたプサメテク 1 世のその後についても、あまり史料が残っておらず詳しいことは分からない。プサメテク 1 世は治世の初期をデルタの諸侯を臣従させることに費やしていたと考えられる¹¹。デルタの地方統治を担った諸侯たちは、リビア朝中期のシェションク 3 世治下に出現した。彼らは「大君（大首長 [wr ʕあるいは wr n wrw]）」とされることが多い¹²。ヘロドトスはプサメテク 1 世が他の 11 人の王と争い、イオニア人とカリア人の兵を味方に引き入れて勝利したことを伝えている（『歴史』II, 152）。これはプサメテク 1 世がギリシア人やカリア人を傭兵として採用し、ライヴァルであったデルタ諸侯を制圧あるいは臣従させていったことを伝えているものと考えられる。

同時代史料にも「大君」を号する人物がプサメテク 1 世治下に確認されている。プサメテク 1 世の治世 8 年の紀年を持つ奉献碑に、「世襲貴族、侯、大君、司令官パディコンス (*r-pʕt ḥ3ty-ʕ wr ʕ ḥ3wty P(3)-di-Ḥnsw*)」なる人物が現れる¹³。東部デルタ中央のファルバイトスを居所としたこの人物は、プサメテク 1 世の紀年を用いていることから、この時すでに王に臣従していたと考えられる。しかしリビア王朝時代以来続く称号所持形態を示すこの人物は、大きな勢力をファルバイトス一帯に持っていたであろう。今のところメンフィスで確認される一番若い紀年は、このファルバイトスで確認されるのと同じ第 8 年である¹⁴。このことから、史料的には第 8 年までに東部デルタからメンフィスに至るエジプト北部でプサメテク 1 世の王権が認められることになったといえることができる。しかしデルタ諸侯を完全に一掃するには、かなりの歳月を要したことが史料から窺える。次王ネカウ 2 世の第 7 年の紀年を持つ奉献碑には、「大君パマイの子プサメテク」なる人物が現れる¹⁵。大君パマイは中央デルタのブシリスを勢力基

11 Cf. Kitchen, 1996, 400-402; Agut-Labordère, 2013, 975-977; Gozzoli, 2017, 8-9.

12 デルタの諸侯については、Yoyotte, 2012; Moje, 2014 を参照。

13 奉献碑 (Louvre E.10572) の碑文。Cf. Ritner, 2009, 582-584; Jansen-Winkel, 2014a, 57-58; Moje, 2014, 340.

14 第 8 年の紀年を持つステラ (Louvre C.101) がある。Cf. Jansen-Winkel, 2014a, 67.

15 Jansen-Winkel, 2014a, 288; Moje, 2014, 320-321.

盤とした人物で、その子がネカウ2世の治世下まで生きていることを考えれば、大君パマイはプサメテク1世の治世後半にブシリス周辺で大きな勢力を持っていたことになる。その後「大君」は前4世紀まで見られなくなることから¹⁶、プサメテク1世は半世紀を超えるその長い治世を通じて、徐々に「大君」らを排除していったのであろう¹⁷。

大きな転機が治世9年（前656年）に訪れた。この年、プサメテク1世はアメン神妻の後継者として自身の王女ネトイケルトをテーベに送り込んだ。王女をテーベに送る大任を果たしたのは、ヘラクレオポリスの有力者セマアタウイテフナクトであった¹⁸。テーベがサイス朝の王女をアメン神妻の後継者として迎えるということは、テーベがプサメテク1世を王として認めたということの意味している¹⁹。アッシリアによるテーベ攻略の翌年（前662年）、テーベでは神官の就任記録をクシュ王タヌタマニの治世3年を用いて記録していた²⁰。またネトイケルトを迎えた前年の前657年の碑文もタヌタマニの治世8年のこととされていた²¹。テーベはアッシリア侵攻後、クシュ王がヌビアへ撤退した後も、クシュ王を王として認めていたのであった。しかしネトイケルトを迎えたプサメテク1世の治世9年以降、テーベはサイス朝の紀年を用いることになった。ここにプサメテク1世によるエジプト再統一が遂に果たされたのであった。この後、プサメテク1世は「アメン神妻の家令」などの要職に下エジプト出身者を送り込み、テーベの支配を確立していった²²。

サッカラ南で発見された一連のステラは、治世11年にリビア人との戦いがあったことを伝えている²³。この戦いをエジプト西境の危機とみるか、あるいは王の正統性をプロパガンダするための儀礼的戦争とみるかで見解は分かれるであろうが²⁴、プサメテク1世が本土防衛に意を用いていたことは確かであろう。ヘロドトスはプサメテク1世が南のエチオピア（クシュ）に備えてエレファンティネに、東方のシリアやアラビアに備えてダフネに、そして西のリビアに備えてマレアにそれぞれ守備隊を駐屯させたと伝えている（『歴史』II, 30）。さらにヘロドトスはプサメテク1世が彼に協力したイオニア人とカリア人をペルシオン支流に相對する「陣

16 第30王朝末からアレクサンドロス時代にかけて生きたと考えられるパディアセトなる人物が大君の称号を持つ。

この人物に関しては Fujii, 2015 を参照。

17 Cf. Agut-Labordère, 2013, 975-977.

18 「ネトイケルト・ステラ」から知られる。Cf. Caminos, 1964; Der Manuelian, 1994, 297-321, pls. 1, 13; Ritner, 2009, 575-582; Jansen-Winkeln, 2014a, 16-19.

19 Cf. Kitchen, 1996, 403-404; Coulson, 1996, 183-184; Gozzoli, 2017, 11.

20 Cf. Jansen-Winkeln, 2009, 245-247.

21 Cf. Jansen-Winkeln, 2009, 248; Ritner, 2009, 573-574.

22 Cf. Kitchen, 1996, 404-405; Agut-Labordère, 2013, 977-981. アメン神妻を中心とした行政に関しては、Graefe, 1981 を参照。

23 Cf. Jansen-Winkeln, 2014a, 10-14; Der Manuelian, 1994, 323-332, pls 2-3, 14; Ritner, 2009, 585-587. その他の参考文献については、Gozzoli, 2017, 12-13, n.31 を参照。

24 Cf. Ritner, 2009, 585.

屋」と名付けられたところに住ませたとしている（『歴史』II, 154）。この陣屋とされる場所は、恐らくペルシオン支流の東西に位置するダフネとテル・ケドワ（Tell Qedwa(T.21)）のことと考えられる²⁵。また後者はミグドルと呼ばれた場所でもあった可能性が高い²⁶。実際、両遺跡からはギリシア陶器が多数出土している。ダフネではプサメテク1世の鎮壇具が発見されており、この要塞がプサメテク1世によって建造されたことが知られている²⁷。テル・ケドワの要塞も出土資料から建造者は特定できていないが、サイス時代のものであったと考えられている²⁸。またヘロドトスは伝えていないが、北方の地中海を臨む河口に位置したテル・エル＝バラムもプサメテク1世によって要塞化されていたことが指摘されている²⁹。西部デルタに位置するナウクラティスも、後に交易拠点として繁栄するが、傭兵の駐屯地でもあったことが指摘されている³⁰。このようにプサメテク1世は国境に要塞を建造して敵の攻撃に備えていたのであった。

プサメテク1世の時代、傭兵としてギリシア人やカリア人がエジプトに居住するようになったが、そればかりでなく交易のためにエジプトを訪れるギリシア人も増えていった。ヘロドトスはアマシス（アアフメス2世）がギリシア人にナウクラティスの町に居住することを許したとしているが（『歴史』II, 178）、ナウクラティスの発掘成果はこの町の歴史がプサメテク1世の治世にまで遡ることを明らかにしている³¹。サイス王朝時代以降、エジプトはエーゲ海周辺地域と密接な関係を持つようになり、特にこの地域との交易を重視するようになっていった³²。

こうしてエジプト再統一を成し遂げ、エジプトの支配を確立していく中で、プサメテク1世はアッシリアへの貢納を停止し、アッシリアから自立したことがアッシリア側の史料から知られている。この史料にはリュディア王ギュゲスがエジプト王ツシャメルキに援軍を送ったが³³、その時既にエジプト王はアッシリアへの貢納を停止していたことが記されている³⁴。ツシャメルキは別の史料からピシャメルキの誤りであり³⁵、エジプト名プサメテクのことと考えられる。この史料でプサメテクはアトリビスに置かれた時のようなアッシリア名ではなくエジ

25 Lloyd, 1988, 137; Asheri, 2007, 355.

26 Oren, 1984; Smoláriková, 2008, 48-54.

27 ダフネについては Smoláriková, 2008, 77-82 を参照。

28 テル・ケドワについては Smoláriková, 2008, 48-54 を参照。

29 Smoláriková, 2008, 65-70.

30 Coulson and Leonard, 11; Coulson, 1996, 186-188; Smoláriková, 2008, 70-77.

31 Coulson and Leonard, 11; Coulson, 1996, 186-188; Smoláriková, 2008, 70-77.

32 Möller, 2000.

33 この記録からエジプトとリュディアが同盟していた可能性が指摘されている。Cf. Kitchen, 1996, 406; Coulson, 1996, 184-185.

34 Luckenbill, 1927, 298.

35 Cf. Onasch, 1994, Teil 2, 153.

プト名で記されており、“エジプト”の王とされていることも注目される。ギュゲスの死は前653年頃のことと考えられているので、プサメテク1世はそれ以前の前655年ないし前654年には貢納を停止してアッシリアから自立していたことになる³⁶。前655年はプサメテク1世の治世10年にあたる。恐らく彼は、治世9年におけるエジプト再統一直後にアッシリアへの貢納を停止して自立を果たしたのであろう。プサメテク1世はアッシリアの後ろ盾を利用してエジプトの再統一を果たすとともに自らの支配権を確立し、それを成し遂げた後にアッシリアから自立する道を選んだということになる。王国を導く指導者として、十分に有能な人物であったと言えそうである。

アッシリアから自立したプサメテク1世は、治世の中頃からアッシリア支配下にあったシリア・パレスティナ方面に進出していった³⁷。ヘロドトスはプサメテク1世がシリアの大都市アゾトス（アシュドド）を29年間の包囲の末に攻略したと伝えている（『歴史』II, 157）。最近になって、ショボーがプトレマイオス2世時代のものと考えられていたオストラコン（Ostoracon de Karnak LS 462.4）を再検討し、プサメテク1世はその治世の第29年にアシュドドを攻略したと主張している³⁸。もしこの見解が正しいのであれば、ヘロドトスのいう29年間の包囲は誤伝であったということになる。

エジプト側の史料は何も語らないが、プサメテク1世はさらに北へと勢力を拡大していった。その治世の末にはエジプト軍がシリア北部で軍事行動をとっていることが新バビロニアの歴代記から知られる。それによると、新バビロニアのナボポラッサルの治世10年、北部シリアにおいてバビロニア軍が引き揚げる所をエジプト・アッシリア連合軍が追撃したことが記録されている³⁹。これは前616年のことで、プサメテク1世の治世49年のことになる。当時、アッシリアは新興のメディアと新バビロニアに攻められており、プサメテク1世は旧宗主であるアッシリアを救援するべくシリアへ派兵していたのであった。エジプトがアッシリアを支援していたのは昔からの誼によるだけではなく、新興のメディアや新バビロニアに対抗するため、エジプトとの緩衝地帯としてアッシリアが存続することを望んだからであろう。しかし衰退著しいアッシリアは劣勢を挽回することが出来ず、前612年には遂にニネヴェが陥落した。これはプサメテク1世の治世53年のことである。アッシリアはアッシュルウバリト2世を王に立て、ハランに亡命政府を樹立して対抗した。新バビロニアの歴代記は、なおエジプト軍がアッシリアを支援していたように伝えているのだが⁴⁰、結局、前610年にハランが陥落し事実上アッシリアはここに滅亡した。これはプサメテク1世が崩じた治世55年、即ちネカウ2世の元年にあたる年であった。プサメテク1世の治世末、シリア情勢は急を告げていた。

36 Kitchen, 1996, 406 and n.959.

37 プサメテク1世時代のシリア・パレスティナについては、Schipper, 2011 を参照。

38 Chauveau, 2011.

39 新バビロニアの歴代記は、Wiseman, 1956 の英訳を参照した。Wiseman, 1956, 55.

40 Wiseman, 1956, 63.

一枚のデモティック・パピルス（Berlin 13588）の記述から、晩年のプサメテク1世の行動が推測されている。このパピルスは、ダフネのすぐ近くにプサメテク1世のミイラ制作施設があったことを伝えている⁴¹。このことから、恐らく70を超える老齢に達していたプサメテク1世は、要塞ダフネでシリア遠征を準備している最中に亡くなった可能性が指摘されているのである⁴²。彼は老骨に鞭打って自らシリアへ遠征するつもりでいたのかもしれない。困難な国際情勢のなか、一代でエジプト王国を再興した英主プサメテク1世は、混迷を深めるシリア情勢の行く末を見届けることなく、前610年にこの世を去った。そして彼が計画していたシリア遠征は、継嗣ネカウ2世によって実行されることになったのである。

4 ネカウ2世（前610年—前595年）〔図2〕

ネカウ2世は歴史を左右しかねない重要な戦争を戦ったが、残念なことに、これらの戦争に関するエジプト語史料が未だ発見されていないことから、エジプト側の史料からネカウ2世の戦争を議論することは難しい状況にある。彼の戦争については、新バビロニアの歴代記、『旧約聖書』、ヘロドトスの『歴史』などから知ることができる。ここではアッシリア学者の研究に依拠して、主に新バビロニアの歴代記からネカウ2世治下の戦いを見ていくことにする⁴³。

即位して間もなく、ネカウ2世は父が準備していたシリア遠征を実行に移した。それは彼の治世第2年、前609年のことであると推測される。『旧約聖書』の記述を信じることができるのであれば、この遠征はネカウ2世自ら兵を率いた親征であった。歴代誌下35章20-24節によると、シリアを目指して北進するエジプト軍の前にユダ王国の王ヨシヤが立ちはだかり、メギッドでエジプト軍と交戦した。ヨシヤは傷を負い、その後まもなくして亡くなったという。列王記下23章29節においてもヨシヤ王がネカウ2世を迎え撃とうとして出撃し、メギッドで殺害されたことを伝えている。その後エルサレムではヨシヤの子イエホアハズが王となったが、ネカウ2世はイエホアハズを廃して、その兄弟のイエホヤキムを立てて王としたという（列王記下23章30-34；歴代誌下36章1-4節）。先にも述べた通り、エジプト語の同時代史料を欠くことから、『旧約聖書』が伝えるこれらのことの歴史的信憑性は今のところ不明なままである。事情は不明だが、ネカウ2世がヨシヤを殺害しユダ王国の王位継承に介入したのであれば、それはエジプトによるパレスティナ支配の安定化を図ってのことであつたらう⁴⁴。いずれにしても、ネカウ2世にとってユダ王国での出来事は何よりも重要なことという訳ではなかった。目下の最大の重要課題は、新バビロニアを討ってアッシリアを復興させ、シリア情勢を安

41 Erichsen, 1956, 15, 24.

42 Smoláriková, 2008, 95.

43 山田 2017, 25-26, 29-30, 42-51 も参照。

44 この問題については、長谷川 2013 も参照。またサイス朝初期のシリア・パレスティナについては、Schipper, 2011 を参照。

定させることであった。エジプト軍は決戦の地カルケミシュに向けて北進を続けた。

アッシュルウバリト2世が立て籠っていたハランは、ナボポラッサルの治世16年、即ち前610年に既に陥落していた⁴⁵。しかし新バビロニアの歴代記は、ハラン陥落後、アッシュルウバリト2世がエジプトの大軍勢に支援されてハラン奪還を目指して攻撃してきたことを伝えている⁴⁶。ネカウ2世の軍勢が間に合ったのかどうか定かでないが、大軍勢とされていることを考えると、この戦いに新手のエジプト軍が参戦していた可能性は十分考えられることであろう。しかし、いずれにしてもこの時ハランは奪還できなかった。

その後のネカウ2世の所在は明らかではないが、エジプト軍は北部シリアで軍事行動を続けていた。新バビロニアの歴代記は、ナボポラッサルの治世20年、即ち前606年にエジプト軍がバビロニア軍の駐屯するキムフを攻略したことを伝えている。これに対しナボポラッサルも出陣し、クラマティなる町に本営を置き周辺の町々を攻略していった。しかし病のためか、バビロニア王はその後帰国し、カルケミシュを出撃したエジプト軍がクラマティを攻撃した⁴⁷。エジプト軍とバビロニア軍は、北部シリアで一進一退の攻防を続けていたのだった。そしてエジプトにとって一大転機となる運命の前605年がやってくる。

新バビロニアの歴代記によると、カルケミシュの戦いがあったのは、ナボポラッサルの治世21年、即ち前605年のことであった。この年は、病のためか本国に留まったバビロニア王に代わって王太子ネブカドネザルがバビロニア軍を率いて出撃した。バビロニア軍はユーフラテス川を渡ってエジプト軍が駐屯するカルケミシュを攻撃した。この時、ネカウ2世が居たのかどうかは明らかではない。エジプト軍は応戦したが遂に敗れ、ハマトへと撤退した。追撃したバビロニア軍はハマトでもエジプト軍を破り、こうしてネブカドネザルがシリアを制圧することになった⁴⁸。そして歴史的な大敗を喫したエジプトは、シリア・パレスティナを放棄してエジプト本国に撤退せざるを得なくなったのである。ネカウ2世の治世6年のことであった。

翌年、新王ネブカドネザル2世はシリアへ出陣し、シリアの諸侯を臣従させた。そして南へと進撃してパレスティナのアシュケロンを征服した⁴⁹。エジプト本土に危機が迫っていた。しかしシリアに支配権を確立するのに手間取ったらしく、バビロニア王はその後にもシリア遠征を繰り返していた⁵⁰。そして前601年、即ちネカウ2世の第10年、遂にネブカドネザル2世はエジプト本土を攻撃した。

新バビロニアの歴代記はネブカドネザル2世の治世4年にバビロニア王がエジプトを攻撃したことを記録している。それによるとバビロニア軍の来襲を聞いたエジプト王は軍を招集して

45 Wiseman, 1956, 61, 63.

46 Wiseman, 1956, 63.

47 Wiseman, 1956, 67.

48 Wiseman, 1956, 67, 69.

49 Wiseman, 1956, 69.

50 Wiseman, 1956, 71.

迎え撃った。この戦いは大激戦になったようで、歴代記は両軍に大損害が出たこと、そしてバビロニア王が退却しバビロンへ帰還したことを伝えている⁵¹。エジプト軍が激戦の末バビロニア軍を撃退したのであった。

残念なことに、この戦いについてもエジプト側には史料が残っていない。新バビロニアの歴代記は戦場がどこであったのか記録していないが、ヘロドトスの『歴史』にこの戦いに関連すると考えられる興味深い記述がある。ヘロドトスはネカウ2世の治績を述べる件で、「一方陸上ではシリア軍とマグドロスで戦ってこれを破り、その戦闘の後シリアの大都会カデュティスを占領した（松平千秋訳）」としている（『歴史』Ⅱ, 159）。ロイドは、このシリア軍というのが新バビロニア軍のことで、マグドロスはミグドルのこと、そしてシリアの大都会カデュティスはガザのことだとしている⁵²。サイス朝はナイル・デルタ東境を流れるペルシオン支流沿いに幾つかの要塞を築いて防衛線を張っていた。ミグドルは恐らくテル・ケドワ（Tell Qedwa(T.21)）の要塞ないしその付近のことと考えられる⁵³。ネカウ2世は国境に準備していた防衛線でバビロニア軍を撃破し、恐らく追撃してガザにまで至ったのであろう⁵⁴。こうしてネカウ2世はネブカドネザル2世に一矢を報い、カルケミシュの借りを返したのであった。

バビロニア軍が退却し当面の危機は去った。しかしネカウ2世が再びシリアへと軍を進めることはなかった。恐らくエジプト軍の損害も大きく、大規模な軍事行動がとれなかったのであろう。新バビロニアの歴代記は、ネブカドネザル2世が治世5年の一年間を軍の建てなおしに充てた後、治世6年（前599年）からシリア遠征を再開したことを伝えている⁵⁵。そして治世7年（前598年）には「ユダの都市（イェルサレム）」を包囲しこれを攻略したとする（第1次バビロン捕囚）⁵⁶。列王記下24章1-2節によると、ユダの王が反旗を翻したゆえ、バビロンの王はイェルサレムを攻めたという。エジプト側に史料は残らないが、前601年にバビロニア軍を撃退した後、ネカウ2世はパレスティナやフェニキアの王達にエジプトに朝貢して臣従するよう促したかもしれない。しかし列王記下24章7節にある通り、この時ネカウ2世は軍を出すことはなかった。ネカウ2世にはバビロニア軍と直接対決してまで、イェルサレムを救援する動機に欠けていたのではないかと思われる。それはネカウ2世が国家戦略の転換を図っていたと考えられるからである。

ヘロドトス（『歴史』Ⅱ, 158）によると、王はナイルと紅海を結ぶ運河を開鑿しようとしたが断念したという。また軍事に心を向けて多数の三段橈船を建造させ、地中海と紅海に配置

51 Cf. *loc. cit.*

52 Lloyd, 1988, 161-163; Asheri, 2007, 359.

53 Oren, 1984; Smoláriková, 2008, 48-54.

54 テル・エル＝マスキータの発掘は、前7世紀末の破壊の跡を確認している。この破壊がバビロニア軍によるものであったのなら、この戦いの折にバビロニア軍の一部はデルタ東部に侵入した可能性がある。Cf. Holladay, 1982, 21-23.

55 Wiseman, 1956, 71.

56 Wiseman, 1956, 73.

したという（『歴史』Ⅱ，159）。さらにヘロドトスは、王がフェニキア人に紅海よりアフリカ大陸を船で一周させたとも伝えている（『歴史』Ⅳ，42）。これらの所伝は、ネカウ2世が海上戦力を重視するようになったことを示している。このことは、同時代史料からも窺うことができる。

エレファンティネで発見されたネカウ2世のステラ断片には、僅かな判読可能箇所だけで、大小さまざまな10種類の船が22隻以上リストアップされている⁵⁷。ヌビアでの騒擾が言及されていることから、あるいはヌビア遠征に関する記録かもしれない。ヘロドトスが伝える地中海と紅海の船隊とは異なるものであり、またすべてが軍船とは限らないのだが、ヌビアの騒擾を受けてネカウ2世が多数の船を動員していることが分かり興味深い。サイス朝が海上戦力を重視していたことは、この時代の軍事称号の研究結果から明らかである。サイス朝以前の史料には殆ど見られることのなかった「王の船隊の長官」など船隊司令官を表わす称号⁵⁸が、この時代になって多数見られるようになるからである⁵⁹。

有力な海上戦力はシリア・パレスティナへのアクセスを容易にするであろう。もしかすると紅海を經由してペルシア湾からバビロニア本土を窺うことも視野に入れていたのかもしれない。またこれら船隊は軍事作戦だけではなく、交易などにも運用され、物と人の大量輸送に一役買ったであろう。エジプトは海洋ルートで各地と繋がることによって、大きな富を手に入れることができるのである。新バビロニアが「陸の帝国」を志向したのに対し、サイス朝は対外政策を転換させ「海の帝国」を志向することになったと言えるのではないだろうか。後のプトレマイオス朝も「海の帝国」と考えられるようになっていくが⁶⁰、その起源はサイス朝の対外政策の転換に求められるであろう。さらに中世のマムルーク朝が、地中海と紅海を結ぶ交易路を掌握することで大いに繁栄したように、この国家戦略はその後エジプトが繁栄するための基本戦略になったと言えよう。サイス朝、就中ネカウ2世の治世はエジプトの歴史のまさに一大転換期であった。

ネカウ2世の時代以降、海上戦力を重視するようになったサイス朝の王は、シリア・パレスティナの王達に貢納を求め、エジプトに臣従するよう促しても、陸ではバビロニア軍との直接対決を避け、堅固な要塞によって東部国境を防衛することに専念したのであった。それゆえ前598年、ネカウ2世の第13年にネブカドネザル2世がイェルサレムを包囲した時、ネカウ2世にはイェルサレム救援の軍を出す選択肢はなかったであろう。もしバビロニア軍が更に南進してエジプトを攻撃してきたなら、また要塞で固めた東部国境の防衛線でこれを撃退すれば良かったのである。海上ルートを使ってパレスティナへ派兵すれば、バビロニア軍を挟撃するこ

57 Junge, 1987, 66-67, pl.40.

58 称号の表現は、*imy-r ḥꜣw n nb tšwy*「両国の主の船隊の長官」など多様である。Cf. Chevereau, 1985, 235-237, 271-273; Pressl, 1998, 89.

59 Cf. Chevereau, 1985, 319-322, 324-325; Agut-Labordère, 2013, 990-995.

60 例えば、Buraselis, 2013.

とも可能である。エルサレムでバビロニア軍と決戦に及ぶメリットなど何もないのであった。

ネカウ2世は治世第16年、即ち前595年にこの世を去った。カルケミシュにおける敗北が注目を集めてきたため、彼の評価はこれまであまり芳しいものではなかった。しかし彼は国境の防備を固めてネブカドネザル2世のバビロニア軍を撃破し、海上戦力の充実を図って「海の帝国」建設へと舵を切ったのであった。ここで検討してきたように、彼の治世は再評価されるべきであろう。

5 プサメテク2世（前595年—前589年）[図3]

ネカウ2世の後を継いだのは、彼の王子プサメテク2世であった。彼は治世元年に自身の王女アネクネスネフェルイブラーをアメン神妻ネトイケルトの養女とし、アメン神妻の後継者としてテーベに送り出した。次王ウアフイブラーの第4年にネトイケルトが亡くなると、アネクネスネフェルイブラーは予定通りアメン神妻を継承することになった⁶¹。

プサメテク2世の短い治世において最も有名なのが、治世3年（前593年）に行われたヌビア遠征である⁶²。この遠征はヘロドトスも伝えているが（『歴史』Ⅱ, 161）、同時代史料でもエジプト各地で発見された王の戦勝碑⁶³と、従軍した傭兵がアブシンベル神殿などに残したギリシア語のグラフィティ⁶⁴から知られている。プサメテク2世はエジプトの南境エレファンティネまで軍を率いてやって来た。恐らくその後は二人の将軍⁶⁵に軍を預けて遠征させた。遠征はナイルの第1急湍と第2急湍を船で超えるためにナイルの増水期に行われた。遠征軍はクシュ王の都ナパタを抜き、恐らく第4急湍にまで達したと考えられる。そして引き返してきた。

プサメテク2世がこの時期にヌビア遠征を行った理由は定かでない。クシュ王国を滅ぼしたわけでもないし、また新王国時代のようにヌビア総督を置いてクシュを支配しようとしたわけでもない。戦利品を獲たこと以外に、あまり得るもの多くない遠征だったように思われる。こうしたことから、恐らく最大の目的はエジプトの南境を安定させることにあったのではないかと考えられる。先に紹介したネカウ2世時代の碑文でも、ヌビアの騒擾が言及されていた。エジプトはエレファンティネに守備隊を置き、その南の下ヌビアを恐らく支配下に置いていた⁶⁶。史料から明らかになるわけではないが、ヌビアの有力者たちには、しばしば朝貢が求められたであろう。これがヌビア騒擾の火種となったに違いない。プサメテク2世は、下ヌビア

61 「アネクネスネフェルイブラー・ステラ (Cairo JE 36907)」から知られる。Cf. Leahy, 1996; Jansen-Winkel, 2014a, 376-377; Gozzoli, 2017, 104-107.

62 この遠征については、Jansen-Winkel, 2016; Gozzoli, 2017, 45-61 を参照。

63 アスワン近郊のシェラル、テーベのカルナク神殿、タニスで発見されている。Cf. Gozzoli, 2017, 107-113; Der Manuelian, 1994, 337-371, pls. 5-8, 16-18; Jansen-Winkel, 2014a, 303-304, 313-314, 318-319.

64 歴史学研究会編 2012, 172-173 を参照。

65 ギリシア語のグラフィティによるとポタシムトとアマシスであった。Cf. *loc. cit.*

66 Gozzoli, 2017, 46.

を安定させるためには、その背後にあったクシュ王国に打撃を与える必要があると判断したのではないだろうか。次に述べるように、この遠征の直後、治世4年（前592年）にプサメテク2世はシリアへ遠征している。このシリア遠征に進発する前に後顧の憂いを断つ必要があったのであろう。

ダリウス1世時代のデモティック・パピルス（Papyrus Rylands IX）に、プサメテク2世が治世4年（前592年）にカル（*H3rw*）の地へ行ったことが記されている⁶⁷。戦闘があったようには記述されておらず、この史料からは、王がカルの地へ行き帰ってきたことしか分らない。カルの地はシリア地方を指すが、シリア地方の何処であったかまでは分らない。しかし『旧約聖書』の記述から、このシリア遠征が当時のシリア・パレスティナ情勢に大きな影響を与えたことが窺える。

前598年、ネカウ2世の第13年にエルサレムが攻略された時、エジプト王がバビロニア軍との決戦を避けたこともあり、プサメテク2世時代のシリア・パレスティナの諸王はネブカドネザル2世に臣従していた。実際、ネブカドネザル2世の第7年（前598年）に書かれた角柱碑文から、テュロス、ガザ、シドン、アルワド、アシュドドの王達がネブカドネザル2世に臣従していたことが分かる⁶⁸。しかしこのような情勢にあっても、プサメテク2世はネブカドネザル2世にそれほど脅威を感じていなかったようである。そうでなければ、北方の備えが手薄になりかねないヌビアへの大遠征を実行することは出来なかったであろうし、バビロニア王が自らの勢力圏と認識しているシリア・パレスティナへ軍を率いて遠征することもできなかったであろう。

プサメテク2世のシリア遠征の目的は何であったのか？ それはやはりバビロニア軍と戦うためではなかったであろう。軍を率いてシリア・パレスティナへ行くことによって、エジプトのプレゼンスを示し、そしてエジプトへの貢納と臣従を促すことであったと考えられる。一時的にはあったにせよ、エジプト王が軍を率いてやって来れば、シリア・パレスティナの王達は、戦いを避けるためにも貢納せざるを得なかったであろう。これは戦利品として、エジプト国内では王の勝利をプロパガンダする絶好の材料になったであろう。エレミヤ書27章3節によると、ユダの王ゼデキヤの宮廷にエドム、モアブ、アンモン、テュロス、シドンの王らの使節がやって来ていたという。恐らくプサメテク2世のシリア遠征の結果、これらの王達はネブカドネザル2世に反旗を翻すことになったと推測される。しかしそれはプサメテク2世がこの世を去った後のことであった。プサメテク2世はシリア遠征の3年後、治世第7年（前589年）に亡くなった。後を継いだのは、彼の子ウアファイブラーであった。

67 Griffith, 1909, Vol. I, pl. XXXVI, Vol. II, pl. 31, Vol. III, 95-96, 237; Vittmann, 1998, 67, 162-165. この遠征については、Kahn, 2008; Gozzoli, 2017, 71-76 を参照。

68 山田 2017, 46, 61 頁を参照。

6 ウアファイブラー（前 589 年—前 570 年）〔図 4〕

ウアファイブラーとは、ギリシアのテキストではアプリエス、『旧約聖書』ではホプラという名で伝わる王のことである。前 588 年末から前 587 年初めの頃⁶⁹、ネブカドネザル 2 世は反旗を翻したユダ王国を攻めてイェルサレムを包囲した。これはウアファイブラーの第 2 年から第 3 年のことになる。エレミヤ書（37 章 5 節, 11 節）によると、この時エジプト王が軍を派遣し、ネブカドネザル 2 世はイェルサレムを退いたという。これが事実であれば、ネブカドネザル 2 世もエジプト軍との直接対決を避けていた可能性がある。プサメテク 2 世のシリア遠征の時にバビロニア軍との戦いに至らなかったのもこのためかもしれない。もとよりバビロニア軍との直接対決を望まないエジプトは、ネブカドネザル 2 世がイェルサレムを退いたのを知りエジプトに帰還した（エレミヤ書 37 章 7 節）。しかしネブカドネザル 2 世の意志は固かった。彼は再びイェルサレムを包囲し、前 586 年にこれを陥落させた。住民はバビロンに捕囚され（第 2 次バビロン捕囚）、ここにユダ王国は滅亡した。これはウアファイブラーの第 4 年のことになるが、この二度目の包囲に対してエジプト王は軍事行動を起こさなかった。理由は前 598 年におけるイェルサレム陥落の時と同様であったろう。エジプト側には、バビロニアと直接対決してまでイェルサレムを救援する理由がなかったのである。とは言え、これでこの地域へのエジプトの介入が終わったわけではなかった。

2011 年にダフネで発見されたウアファイブラーの戦勝碑⁷⁰は、イェルサレム陥落の 3 年後、ウアファイブラーの第 7 年に王が東への道を通してシナイ半島へ出撃したことを伝える⁷¹。碑文は後半部が現存していないことから、どのような戦いであったのか詳細は不明である。恐らくシリア方面⁷²と考えられる地域からやって来た使者の情報を得て、王は出撃している。まずウアファイブラーはエジプトの防衛態勢を整えたようである。王は軍を招集して、エジプトの周りに防護柵を設け、そしてすべての道を封鎖している。ステラの後ろ半分が欠損していることから、この後のことは分からない。戦勝碑の型式を取っていることから、このあと敵が粉碎され王が勝利したことが述べられていたであろう。

残存部分から読み取れるのはエジプト本土防衛の準備であることから、この碑文は新バビロニアのエジプト攻撃に関わるものであったかもしれない。この場合、ウアファイブラーは新バビロニアの攻撃を撃退したということになるだろう⁷³。ただ碑文には、東への道を通してシナイへ出撃したとあり、このことからエジプトが防衛線を張っていたデルタ東境とは異なる戦場で

69 山田 2017, 48 頁。

70 Maksoud and Valbelle, 2013.

71 「治世 7 年シェムウ季の第 4 月。陛下は東への道を始めから終わりまで通ってシナイへと出撃した (*ḥ3t-sp 7 3bd 4 šmw pr.n ḥm.fr bi3 šsp tp w3t r i3bt r drw.s*)」とある。Cf. el-Maksoud and Valbelle, 2013, 2-5.

72 *Nbd-Ḳd(y)* からの使者とされる。*Nbd-Ḳd(y)* については、Maksoud and Valbelle, 2013, 6-7 参照。

73 Cf. el-Maksoud, M. A. and Valbelle, 2013, 8.

新バビロニア軍を迎撃したということになる。

ウアファイブラーの第7年は前583年から前582年にあたる⁷⁴。この時期にネブカドネザル2世がエジプトを攻撃したことがヨセフスの『ユダヤ古代誌』に伝わっている。それによると、ネブカドネザルの第23年（前582年）に彼がエジプトに侵入して王を殺し別の王を立てたという⁷⁵。碑文が示す年代とヨセフスが伝える年代がほぼ一致していることから、ヨセフスの所伝はこのウアファイブラーの第7年における戦争を伝えていると考えることができそうである。しかし同時代史料である碑文はウアファイブラーの戦勝碑であることから、ウアファイブラーの勝利を伝えるものと考えことができ、ヨセフスの所伝とは大きく矛盾する。また『旧約聖書』にもネブカドネザル2世による下エジプト攻撃⁷⁶やエジプト征服⁷⁷の予言があり、さらにエレミヤ書44章30節にはウアファイブラー（『旧約聖書』ではホプラ）がネブカドネザル2世によって殺害されるであろうとする予言まで記されている。ネブカドネザル2世は何度かエジプトを攻撃しており、その折にデルタ東部に攻め入ったこともあったのであろう⁷⁸。そうしたことが、オリエント世界にこのような所伝が残った理由であったかもしれない。しかしエジプトが新バビロニアに征服されたという事実はないし、また結局のところいずれの攻撃においてもバビロニア軍は最終的に撃退されてもいるのである。このウアファイブラーの第7年の戦勝碑は、こうしたバビロニア軍撃退の記録の一つであった可能性は十分あると言えるだろう。

あるいは次のような推測も成り立つ。ウアファイブラーの第7年、即ち前583年から前582年は、13年間に及んだという新バビロニアによるテュロス包囲⁷⁹の時期に一致している。このことから、この碑文はウアファイブラーがフェニキア地方へ救援のため出撃したことを記録しているのかもしれない⁸⁰。以上のような可能性が指摘されているが、正確なところは分からないままである。

ヘロドトスによると、アプリエス（ウアファイブラー）はフェニキアのシドンを攻めテュロスと海戦に及んだという（『歴史』Ⅱ, 161）。またディオドロスはアプリエスがシドンを攻略し、キュプロスとフェニキアの諸都市を打ち負かし、莫大な戦利品を獲てエジプトに帰還したことを伝えている（『歴史文庫』Ⅰ, 68）。しかし管見の限りではあるが、今のところウアファイブラーのフェニキア遠征を証明するエジプト語史料は発見されていない。しかしこの所伝を否定する史料もない。ロイドは新バビロニアによるテュロス包囲が終了した直後、前574年頃から前

74 el-Maksoud and Valbelle, 2013 では前582年とする。ここでは、Hornung, 2006による年代に拠った。Cf. *ibid.*, 275.

75 『ユダヤ古代史』Ⅹ, 7. フラウィウス・ヨセフス, 1984, 192頁参照。

76 エレミヤ書43章8-13節。

77 エレミヤ書46章13-26節；エゼキエル書29-32章。

78 例えば Holladay, 1982, 21-23を参照。

79 山田2017, 49-50参照。

80 Gozzoli, 2017, 76.

570年頃の間にはフェニキア遠征があったのではないかと指摘している⁸¹。

ウアフイブラーの戦争については不明確な点が残されているが、イェルサレム陥落後もエジプトはシリア・パレスティナへの介入を止めることなく、新バビロニアとの深刻な対峙が続いていたことを、これらの史料から読み取ることができるであろう。シリア・パレスティナの王達は、相変わらずエジプトと新バビロニアの間で板挟みになっていた。歴史地図では、しばしばエジプト国境付近までが新バビロニアの版図として示されるが、このようにみれば、北部シリアはともかく、フェニキア地方やパレスティナは新バビロニアの版図とできるほど安定したものではなかったのではないだろうか。少なくともエジプトは、この地域に対する権益を放棄しようとはせず、度々介入していたのではないかとと思われる。

7 アアフメス2世（前570年—前526年）[図5]

この後、ウアフイブラーは王位を追われることになった。ヘロドトスによると、アプリエス（ウアフイブラー）はキュレネ（リビア）を攻めたが、アマシス（アアフメス2世）を首班とする反乱が起こり、王はアマシスに敗れ王位を追われることになったという（『歴史』Ⅱ、161-163, 169）。このウアフイブラーとアアフメスとの戦いについては、アアフメス2世の戦勝碑⁸²が残っており史実であることが確認されている。碑文の状態はあまり良くないのだが、それによるとアアフメス2世の元年に西部デルタで戦いがあり、ウアフイブラーが敗れている。そして治世4年には、アアフメス2世がセテティウ人（*sttyw* アジア人）を伴う軍勢との戦いに勝利し、戦死したウアフイブラーを埋葬したことが記されている⁸³。

この碑文に現れるセテティウ人は新バビロニアのネブカドネザル2世の軍勢であったと考える研究者が多い⁸⁴。新バビロニア側の史料も治世37年（前568年）にネブカドネザル2世がエジプトを攻撃したことを伝えている⁸⁵。これらのことから、次のような歴史が復元されている。ウアフイブラーはアアフメス2世の治世元年（前570年）に西部デルタでの戦いに敗れ、新バビロニアに亡命した。そしてアアフメス2世の治世4年に、新バビロニアはウアフイブラーを傀儡王としてエジプトの王位に就けるべく彼を伴ってエジプトを攻撃した。しかしアアフメス2世によって撃退され、ウアフイブラーは戦死した⁸⁶。

先にもあげたエゼキエル書29-32章にみられるネブカドネザル2世によるエジプト征服の

81 Lloyd, 1988, 170-172; Asheri, *et al.*, 2007, 361.

82 Jansen-Winkel, 2014a, 449-452; Jansen-Winkel, 2014b. 以前はCairo 13/6/24/1、現在はアスワンのヌビア博物館所蔵。

83 Jansen-Winkel, 2014b 参照。

84 例えば、Edel, 1978; Leahy, 1988; Jansen-Winkel, 2014b. しかし新バビロニアのエジプト攻撃とステラに記録されるセテティウ人を含む軍勢との戦いは別の事件だとする見解もある。例えば、Smoláriková, 2008, 41, n.73.

85 Pritchard, 1969, 308.

86 Edel, 1978 が提示した学説。Jansen-Winkel, 2014b も同様の見解を示している。

予言や、エレミヤ書 43 章 8-13 節にみられるネブカドネザル 2 世による下エジプト攻撃の予言は、このアアフメス 2 世の戦勝碑に記される戦いと関係しているのかもしれない。ただウアフイブラーに導かれたバビロニア軍がデルタ東部になだれ込んだ可能性はあるが、エジプトは征服されたわけではなかった。予言は実現しなかったのである。またエレミヤ書 44 章 30 節に記されるウアフイブラー（『旧約聖書』ではホプラ）がネブカドネザル 2 世によって殺害されるであろうとする予言も、この時の戦いと関係するのかもしれない。碑文からは、誰がウアフイブラーに手をかけたのか分からないが、この戦いでウアフイブラーが落命したのは確かだからである。あるいは、ウアフイブラーは亡命したのではなくエジプトの何処か、例えばダフネのような要塞に立て籠っていたということも考えられるかもしれない。この場合、エジプトで王位をめぐる争いが起こったことを好機と捉えた新バビロニアがエジプトを攻撃し、ウアフイブラーを倒すことに成功したが、結局アアフメス 2 世によって撃退されたということも考えられる。いずれにしても、バビロニア軍はまたしてもエジプト軍に撃退されたということに変わりはない。

治世初期の難局を乗り切ったアアフメス 2 世は、こののち比較的安定した長い治世を送った。同時代史料から確認が取れていないのだが、ヘロドトスはアマシス（アアフメス 2 世）がキュプロスを征服したと伝えている（『歴史』Ⅱ，182）。またナウクラティスにギリシア人が居住することを許可したのはアマシスであったとしている（『歴史』Ⅱ，178）。実際には、ギリシア人のナウクラティス居住はプサメテク 1 世時代に遡ると考えられる⁸⁷。アアフメス 2 世が特にナウクラティスと結び付けられているのは、アアフメス 2 世治下にエジプトとギリシアの交流が深まり、ナウクラティスの交易機能が最高潮に達したと関係しているのであろう⁸⁸。またヘロドトスはこの王の治世下にエジプトは空前の繁栄を示したとしている（『歴史』Ⅱ，177）。

しかしアアフメス 2 世の治世の終わり頃には、アケメネス朝ペルシア帝国の脅威がすぐそこにまで迫っていた。治世 44 年にアアフメス 2 世がこの世を去ると、その子プサメテク 3 世（前 526 年—前 525 年）⁸⁹ [図 6] が後を継いだ。しかし凡そ半年後、エジプトを襲ったペルシア軍にペルシオン要塞が破られ、エジプトはペルシア帝国の支配下に置かれることになった。

8 おわりに

本稿ではサイス朝の対外政策を主に新バビロニアとの関係を中心に見てきた。サイス朝初期のプサメテク 1 世からネカウ 2 世の治世まで、エジプトは親アッシリア政策を取りながらシリア・パレスティナへ進出した。しかし前 605 年のカルケミシュの戦いに敗れてシリア・パレスティナから撤退すると、エジプトは新バビロニアと激しく対峙することになった。しかし何

87 もとは傭兵の駐屯地であったと考えられている。Cf. Coulson and Leonard, 1981, 11; Coulson, 1996, 186-188.

88 Coulson and Leonard, 1981, 12.

89 最近では、ペルシアによるエジプト征服を前 526 年とする説が主張されている。Cf. Quack, 2011.

度かシリア・パレスティナへも遠征しているが、新バビロニアとの直接対決は避けていた。こうしたなかネカウ2世の治世以降から海上戦力を重視するようになり、船隊が対外交渉に重要な役割を果たすことになったと考えられる。そして東部デルタの出口を要塞で固め、本土防衛に努めていた。新バビロニアとの直接対決は、新バビロニアがエジプトを直接攻撃した時に限られており、恐らく三度の攻撃があったが、いずれも新バビロニア軍を撃退している。こうしたことから陸上戦力は、専守防衛を基本としていたことを窺うことができる。

シリア・パレスティナとは海上ルートでつながり、ギリシア方面とも新たに積極的な交易をはじめ、さらに南方とは紅海を用いた海洋ルートでつながり、エジプトはその結節点に位置することで経済的な繁栄を実現していたと考えることができる。これは後のプトレマイオス朝やマムルーク朝と同じ繁栄の構造であり、サイス朝は「海の帝国」を志向していたといえるだろう。サイス王朝時代はエジプト王国の一つの大きな転機であった。

このように見てくると、新バビロニアとの対比も再考可能であろう。陸上の状況だけをみれば、新バビロニアの優勢は動かしがたいように見える。しかし当時のエジプトの国家戦略を理解し、海にまで目を転じれば事情は異なってくる。両国の国家戦略は全く異なっていたのである。新バビロニアの本土攻撃もすべて退けており、本土防衛を旨とする戦略は成功している。全体で見ても、カルケミシュでは敗れたものの、その後は何度か新バビロニア軍を撃退しており、直接対決で引けを取ることはなかったことから、必ずしもエジプトが劣勢であったとはいえないであろう。エジプトは新バビロニア軍を撃退しながら良く国家戦略を遂行し繁栄を享受していたと言えるのではないだろうか。

ヘロドトスなどギリシアのテキストは、アマシス時代をエジプトの最盛期とするなど、サイス朝に対しては好意的な評価をしている。これは、この時代におけるエジプト・ギリシア間の交流が活発化してギリシアが先進のエジプト文明に触れ、その進んだ文化を多く受容したことによるだろう。これに対し、列王記下、イザヤ書、エゼキエル書などでは、エジプトは頼りにならない「折れた葦」と表現されている⁹⁰。またエレミヤ書やエゼキエル書では、新バビロニアのネブカドネザル2世がエジプトを征服するという予言まで記されている⁹¹。これは、もちろん実現しなかった予言である。このようにエジプトに対する評価は、かなり悪いといえる。これは、イエルサレム陥落の折にエジプトが積極的に救援しなかったことによるだろう。しかしネカウ2世の治世以降、海上交通を重視するようになったエジプト側から見れば、パレスティナ内陸部はあまり重要ではなくなり、積極的に新バビロニアと事を構えるほどのことではなかったのである。聖書がエジプトを「折れた葦」とみなしているからと言って、エジプトが衰退していたわけではない⁹²。そろそろ聖書史観から距離を置き、同時代史料に基づくサイス王朝時代の研究が我が国でも進んでいくことを期待したい。

90 列王記下 18 章 21 節、イザヤ書 36 章 6 節、エゼキエル書 29 章 6-7 節。

91 エレミヤ書 46 章 13-26 節；エゼキエル書 29-32 章。

92 エジプトの衰退史観には様々な問題がある。拙稿 2006 を参照。

補論 ～歴史地図の問題について～

高校世界史の教科書や概説書などでは、アッシリアの最大版図として、テーベをも含むエジプト全域をアッシリア領のように示す歴史地図がしばしば掲載される。しかし本論で見てきたように、これは歴史的事実に反している。確認しておかなければならないことは、侵略と支配は全く別物だということである。我々はナポレオンがロシアに侵略したということはあるが、ナポレオンがロシアを支配したということはない。アッシリアはエジプトを侵略したが、支配することは事実上できなかった。テーベはクシュ王を王と認め続けていた。それはテーベがアッシリアに攻略された直後、前662年においてでも史料的に確認できることである（タヌタマニの第3年がテーベで用いられている）。

アッシリアはサイスの王プサメテク1世を傀儡としてエジプトを間接統治していたと考えたとしても、やはりエジプトを版図に含むアッシリアの地図はおかしい。プサメテク1世は史料で確認される限りにおいて、治世8年までは下エジプトにその権威が認められていただけである。そして治世9年にエジプトの再統一に成功するが、その直後にアッシリアから自立しているのである。アッシリアがエジプトを支配したように考えるより、アッシリアはエジプトを支配することが出来なかったとみなした方が、より歴史的事実に即しているのではないだろうか？ こうした歴史地図もエジプトの過度の衰退史観を定着させる一因になっているように思われるのである。同じことがエジプト国境にまで迫る新バビロニアの版図を示す歴史地図にも言えることは、本論で述べた通りである。

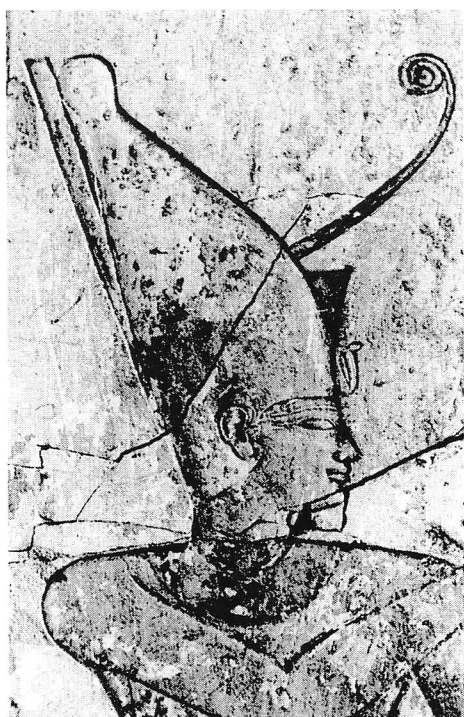


図1 プサメテク1世 テーベ西岸パバサの墓 (TT 279) の墓のレリーフ (Myśliwiec 1988)

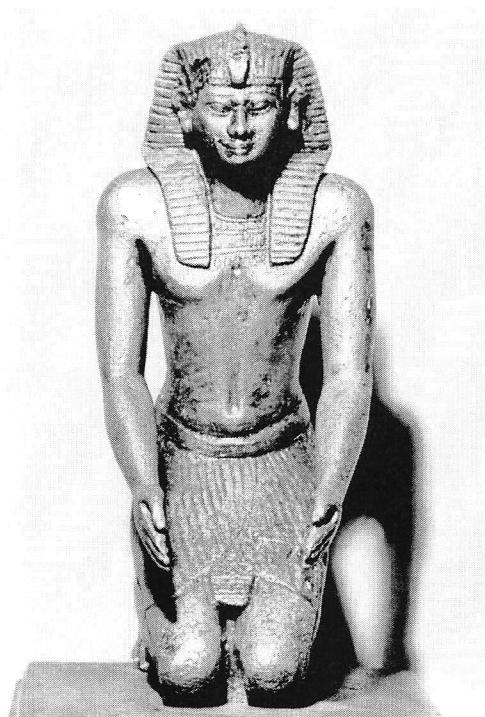


図2 ネカウ2世 青銅製小像 University of Pennsylvania Museum E13004 (Hill 2004)



図3 プサメテク2世 王像頭部 Musée Jacquemart-André MJAP-S 873 (Perdu 2012)



図4 ウアフィブラー 青銅製小像 Metropolitan Museum of Art L.1996.65.1 (Hill 2004)

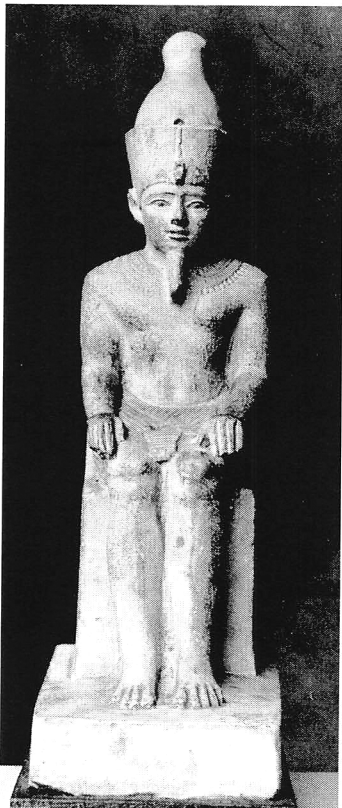
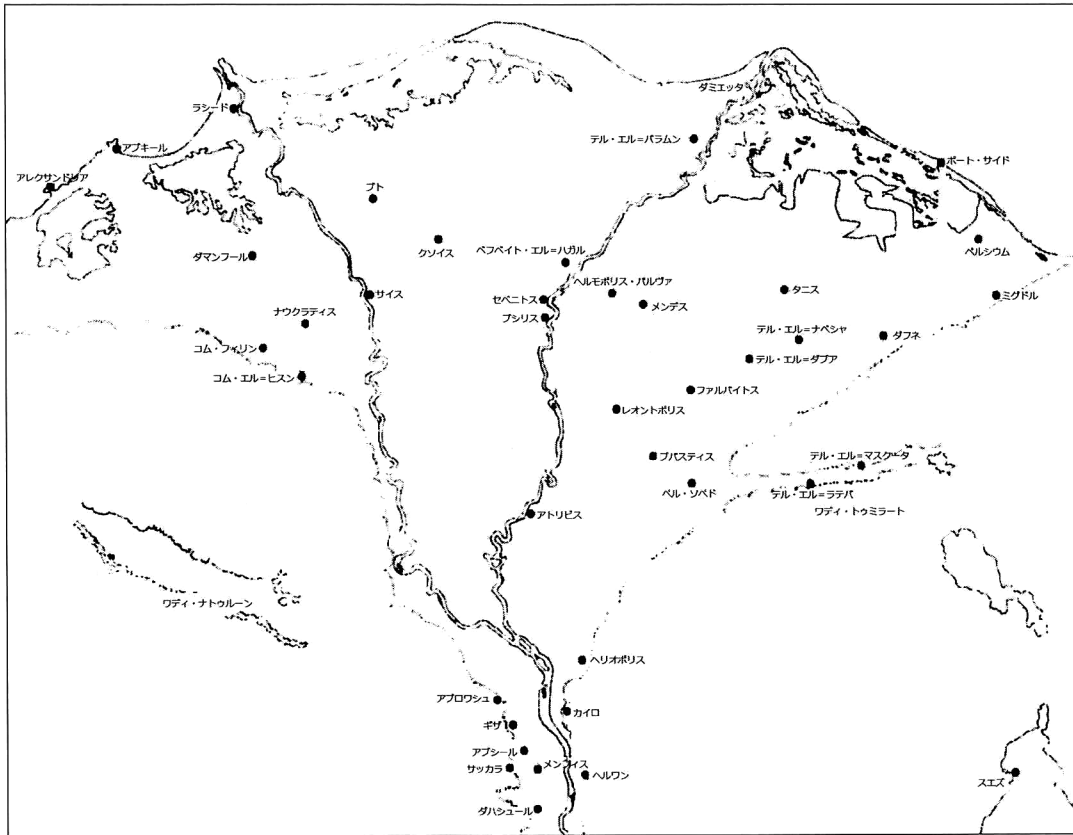


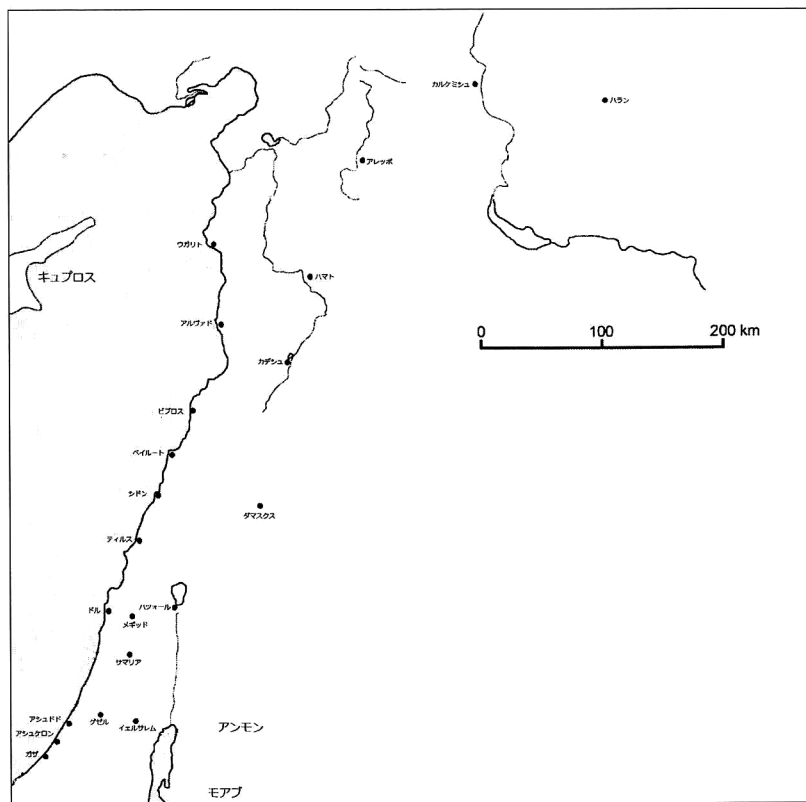
図5 アアフェス2世 石灰岩性小像 Copenhagen National Museum Inv. No.3603 (Myśliwiec 1988)



図6 プサメテク3世 カルナク神殿のレリーフ (Myśliwiec 1988)



地図1 下エジプト



地図2 シリア・パレスティナ

【参考文献】

- Agut-Labordère, D. 2013 : “The Saite Period: The Emergence of a Mediterranean Power”, in J. C. Moreno Gracia, (ed.) *Ancient Egyptian Administration*, Leiden, 965-1027.
- Arnold, D. 1999 : *Temples of the Last Pharaohs*, Oxford U. P.
- Asheri, D. et al. 2007 : *A Commentary on Herodotus Books I-IV*, Oxford U. P.
- Ayad, M. F. 2009 : *God's Wife, God's Servant : The God's Wife of Amun (c.740-525 BC)*, London and New York.
- Bareš, L. 1999 : *The Shaft Tomb of Udjahorresnet at Abusir*, Praha.
- Bassir, H. 2014 : *Image & Voice in Saite Egypt*, University of Arizona Egyptian Expedition.
- Buraselis, K. et al. (eds.) 2013 : *The Ptolemies, the Sea and the Nile. Studies in Waterborne Power*, Cambridge.
- Caminos, R. A. 1964 : “The Nitocris Adoption Stela” *JEA* 50, 71-101.
- Chauveau, M. 2011 : “Le saut dans le temps d'un document historique : des Ptolémées aux Saïtes”, in Devauchelle, D. (ed.) *La XXVIe dynastie continuités et ruptures*, Paris, 39-45.
- Chevereau, P.-M. 1985 : *Prosopographie des cadres militaires égyptiens de la Basse Époque*, Antony.
- Coulson, W. D. E. 1996 : *Ancient Naukratis*, Vol. II, Part I: *The Survey of Naukratis*, Oxford.
- Coulson, W. D. E. and Leonard, Jr., A. 1981 : *Cities of the Delta, I: Naukratis*, Malibu.
- Devauchelle, D. (ed.) 2011 : *La XXVIe dynastie continuités et ruptures*, Paris.
- Edel, E. 1978 : “Amasis und Nebukadrezar II.”, *GM* 29, 13-20.
- Eide, T. et al. 1994 : *Fontes Historiae Nubiorum*, Vol. I: *From the Eighth to the Mid-Fifth Century BC*, Bergen.
- Eigner, D. 1984 : *Die monumentalen Grabbauten der Spätzeit in der thebanischen Nekropole*, Wien.
- Erichsen, W. 1956 : *Eine neue demotische Erzählung*, Wiesbaden.
- Fujii, N. 2015 : “A Prosopographical Study of the Inscription on the Sarcophagus of Pediese(Berlin 29)”, *The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture*, Vol.2, 49-65.
- Gozzoli, R. B. 2006: *The Writing of History in Ancient Egypt during the First Millennium BC (ca. 1070-180 BC): Trends and Perspectives*, London.
- Gozzoli, R. B. 2017 : *Psammetichus II: Reign, Documents and Officials*, London.
- Graefe, E. 1981 : *Untersuchungen zur Verwaltung und Geschichte der Institution der Gottesgemahlin des Amun vom Beginn des Neuen Reiches bis zur Spätzeit*, Wiesbaden.
- Griffith, F. Ll. 1909 : *Catalogue of the Demotic Papyri in the John Rylands Library Manchester*, London.

- Grimal, N.-C. 1981 : *Quatre stèles napatéennes au Musée du Caire JE 48863-48866*, Le Caire.
- Gyles, M. F. 1959 : *Pharaonic Policies and Administration, 663 to 323 B.C.*, The University of North Carolina Press.
- Holladay, Jr. J. S. 1982 : *Cities of the Delta, III: Tell el-Maskhuta*, Malibu.
- Hornung, E., et al. (eds.), 2006 : *Ancient Egyptian Chronology*. Leiden
- James, T. G. H. 1991 : "Egypt: The Twenty-fifth and Twenty-sixth Dynasties", in J. Boardman, et al. (eds.) *The Cambridge Ancient History*, Vol. III, Part 2, Cambridge U.P., Ch.35, 677-747.
- Jansen-Winkel, K. 2009 : *Inschriften der Spätzeit, III: Die 25. Dynastie*, Wiesbaden.
- Jansen-Winkel, K. 2014a : *Inschriften der Spätzeit, IV: Die 26. Dynastie*, Wiesbaden.
- Jansen-Winkel, K. 2014b : "Die Siegesstele des Amasis", *ZÄS* 141, 132-153.
- Jansen-Winkel, K. 2016 : "Der Nubienfeldzug Psametiks II. und die Stele von Schellal", in Lippert, S. L. et al. (eds.) *Sapientia Felicitas: Festschrift für Günter Vittmann zum 29. Februar 2016*, Montpellier, 271-284.
- Junge, F. 1987 : *Elephantine XI: Funde und Bauteile*, Mainz am Rhein.
- Kahn, D. 2008 : "Some Remarks on the Foreign Policy of Psammetichus II in the Levant (595-589 B.C.)", *JEGH* 1, 139-157.
- Kienitz, K. 1953 : *Die politische Geschichte Ägyptens vom 7. bis zum 4. Jahrhundert vor der Zeitwende*, Berlin.
- Kitchen, K. A. 1996 : *The Third Intermediate Period in Egypt*, (1st ed.1972, 2nd ed. with supplement 1986, Reprinted with a new preface 1996), Warminster.
- Leahy, A. 1988 : "The Earliest Dated Monument of Amasis and the End of the Reign of Apries", *JEA* 74, 183-199.
- Leahy, A. 1996 : "The Adoption of Ankhnesneferibre at Karnak", *JEA* 82, 145-165.
- Lloyd, A. B. 1988 : *Herodotus Book II, Commentary 99-182*, Leiden.
- Lloyd, A. B. 2000 : "The Late Period (664-332)", in I. Shaw, (ed.) *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford U.P., 369-394.
- Luckenbill, D. D. 1927 : *Ancient Records of Assyria and Babylonia, Vol. 2: Historical Records of Assyria From Sargon to the End*, Chicago.
- el-Maksoud, M. A. and Valbelle, D. 2013 : "Une stèle de l'an 7 d'Apriès découverte sur le site de Tell Défenneh", *RdE* 64, 1-13.
- Der Manuelian, P. 1994 : *Living in the Past*, London.
- Moje, J. 2014 : *Herrschaftsräume und Herrschaftswissen ägyptischer Lokalregenten: Soziokulturelle Interaktionen zur Machtkonsolidierung vom 8. Bis zum 4. Jahrhundert v. Chr.*, Berlin.
- Möller, A. 2000 : *Naukratis: Trade in Archaic Greece*, Oxford U. P.

- Myśliwiec, K. 2000 : *The Twilight of Ancient Egypt: First Millennium B.C.E.*, Ithaca and London.
- Onasch, H.-U. 1994 : *Die assyrischen Eroberungen Ägyptens*, Wiesbaden.
- Oren, E. D. 1984 : “Migdol: A New Fortress on the Edge of the Eastern Nile Delta”, *BASOR* 256, 7-44.
- Pressl, D. A. 1998 : *Beamte und Soldaten : Die Verwaltung in der 26. Dynastie in Ägypten (664-525 v. Chr.)*, Frankfurt am Main.
- Pritchard, J. B. (ed.) 1969 : *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*, Princeton.
- Quack, J. F. 2011 : “Zum Datum des persischen Eroberung Ägyptens unter Kambyses”, *JEGH* 4, 228-246.
- Ritner, R. K. 2009 *The Libyan Anarchy*, Atlanta.
- el-Sadeek, W. 1984 : *Twety-Sixth Dynasty Necropolis at Gizeh*, Wien.
- Schipper, B. U. 2011 : “Egyptian Imperialism after the New Kingdom: The 26th Dynasty and the Southern Levant”, in Bar, S. et al. (eds.) *Egypt, Canaan and Israel: History, Imperialism, Ideology and Literature*, Leiden, 268-290.
- Smoláriková, K. 2008 : *Saite Forts in Egypt: Political-Military History of the Saite Dynasty*, Prague.
- Stammers, M. 2009 : *The Elite Late Period Egyptian Tombs of Memphis*, Oxford.
- Vittmann, G. 1998 : *Der demotische Papyrus Rylands 9*, Wiesbaden.
- Waddell, W. G. 1940 : *Manetho with an English Translation*, London.
- Wiseman, D. J. 1956 : *Chronicles of Chaldaean kings (626-556 B.C.) in the British Museum*, London.
- Yoyotte, J. 2011 : “Les fondements géopolitiques du pouvoir saïte”, in Devauchelle, D. (ed.) *La XXVIe dynastie continuités et ruptures*, Paris, 1-32.
- Yoyotte, J. 2012 : *Les principautés du Delta au temps de l'anarchie libyenne*, réédition revue et augmentée, Le Caire.
- 長谷川修一 2013 : 「ヨシヤはネコと戦ったのか」『キリスト教学』55, 93-116。
- 藤井信之 2006 : 「エジプトは『折れた葦』か？」関西学院大学西洋史学研究室編『西洋世界の歴史像を求めて』関西学院大学出版会, 35-53。
- フラウィウス・ヨセフス（秦剛平訳）1984 : 『ユダヤ古代誌』IX-X, 山本書店。
- ヘロドトス（松平千秋訳）1971 : 『歴史』上, 岩波書店。
- 山田重郎 2017 : 『ネブカドネザル2世：バビロンの再建者』山川出版社。
- 歴史学研究会編 2012 : 『世界史史料1：古代のオリエントと地中海世界』岩波書店。

図版出展一覧

- 図 1 Myśliwiec, K. *Royal Portraiture of the Dynasties XXI-XXX*, Mainz am Rhein 1988, pl. LII, b.
- 図 2 Hill, M. *Royal Bronze Statuary from Ancient Egypt*, Leiden 2004, pl. 52.
- 図 3 Perdu, O. *Le crépuscule des pharaons : Chefs-d'oeuvre des dernières dynasties égyptiennes*, Bruxelles 2012, 189.
- 図 4 Hill, M. *Royal Bronze Statuary from Ancient Egypt*, Leiden 2004, pl. 59.
- 図 5 Myśliwiec, K. *Royal Portraiture of the Dynasties XXI-XXX*, Mainz am Rhein 1988, pl. LXIV.
- 図 6 Myśliwiec, K. *Royal Portraiture of the Dynasties XXI-XXX*, Mainz am Rhein 1988, pl. LXV.